

特別支援学校における自作教材の共有化の有効性に関する研究

一個に応じた指導・支援の一層の充実を目指してー

横浜国立大学教職大学院 教育学研究科高度教職実践専攻

氏名 伊藤 良

1. A 特別支援学校の現状と課題

A 特別支援学校は、教育部門が二部門（肢体不自由教育部門と知的障害教育部門でいずれも小学部から高等部まで）あり、加えて施設訪問学級や分教室もあるなど、県内でも非常に大規模な特別支援学校である。校内研究については、昨年度学校評価において「研究結果を共有・蓄積し、次年度に引き継いでいくこと」が改善方策に挙げられた。知的障害教育部門高等部（以下 B 高等部）の現状は、縦割り授業が多い状況の中で生徒の個別対応に時間が割かれることが多いことを理由に他クラス・他学年の生徒一人ひとりの実態把握などを教員間で共有していくことに課題がある。そして、教員構成は長く B 高等部に在職する教員が少なく、生徒の指導・支援などが個々の経験や技量に頼られている部分があり人材育成や教員同士の効果的な学び合いの確保に課題がある。

2. 研究の背景

神奈川県教育委員会（2007）では、「経験豊かなベテラン教職員がもつ教育指導に関するノウハウを若い世代に継承し、学校全体の教育力を向上させていくこと」を課題として挙げている。また、中央教育審議会答申（2015）では、「校内研修は日々の授業などにその成果が反映されやすく、教員自身が学びの成果を実感しやすいなど、教員の学ぶモチベーションに沿ったものである。」と記載されている。

3. 研究目的

本研究の目的は、教材の共有化をテーマとした校内研究や校内研修を実践することが自校の教員にとって児童生徒の指導に役立つか。また、教員の主体的な学びにつながるかを明らかにすることである。

4. 課題解決方法

①教材のライブラリー化（全校の取組み）：各学部で

各教員が作成した自作教材を教材集としてまとめる。その過程で教材集は校内サーバーに保存して校内で教員がいつでも見られるように共有できる仕組みをつくる。

②教材共有会（B 高等部の取組み）：生徒の指導に使用する自作教材を学部内で相互に見合っ、他の教員の実践を知ったり、生徒の実態に合った教材を参考にしたりして教員同士が学び合う機会を設定する。

③研修会「日々の教育活動と学習指導要領をつなげて考えよう」（B 高等部の取組み）：B 高等部の教育課程についての基礎的な部分を確認するとともに、自作教材が学習指導要領上においてどの教科、何段階に位置づかかの理解を深める研修会を開く。

5. 結果と考察

①教材のライブラリー化：仕組みを作ったことに関しては回収した質問紙から、86%（85人）が「良い」という評価をした。

②教材共有会：感想については、回収した質問紙から96%（24人）が「良い」という評価をした。

③研修会「日々の教育活動と学習指導要領をつなげて考えよう」：感想については、回収した質問紙から90%（19人）が「良い」という評価をした。

校内研究や校内研修に関しては、児童生徒の指導に直結する内容を実施することが教員にとって分かりやすく指導に役立てやすいことが分かった。また、教員同士が教材の共有をするなど、実践を見せ合える機会を意図的に作っていくことが教員の主体的な学びにつながっていくものだと考える。

参考文献

神奈川県教育委員会(2007) 教職員人材確保・育成基本計画

中央教育審議会答申（2015）「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について（答申）」

清水貞夫(1997) 障害児教育における授業改善の手法 学苑社 他